

平成 25 年 11 月 8 日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 金 東澄 様

亜細亜大学  
藤懸 徳仁

## 2013 年度海外派遣研修報告書

- I はじめに
- II 参加目的
- III プログラム概要
- IV プログラムの研修内容について
- V 目的に関する情報収集
- VI A L A 報告
- VII セントトーマス大学図書館 / ミネソタ大学図書館
- VIII 研修を振り返って
- ※ 謝辞

### I はじめに

このたび私立大学図書館協会国際図書館協力委員会の長期派遣研修により、アメリカのイリノイ大学モーテンソンセンターで開催された国際図書館プログラムに参加する機会を得た。期間は、2013 年 5 月 28 日から 6 月 25 日の 1 カ月のプログラムである。

### II 参加目的

電子書籍やオンラインデータベースなどインターネット経由で資料や情報収集でき、また学習スタイルも個人からグループで討議しながら学習する時代へと変わり、図書館へ来なくとも学習できる状況に図書館が置かれている。本学図書館でもグループ学習において、カリキュラムで少人数のゼミ教育やグループ学習に対応していく必要から、新しい建物内にグループで利用できる学習部屋の設置計画がある。電子資料やグループ学習室など図書館サービスで先駆的な取り組みをおこなっているアメリカの図書館を見学することにより、これからの図書館運営や学習環境構築への参考、現在直面する問題解決の手掛かりを見つきたい。

参加するにあたり、下記 3 つの目標を掲げた。

#### ① 電子書籍について

電子端末を利用した電子資料サービスについて、図書館はどのように管理・運営を行い、

利用者はどのようなサービスを受けているのか考察する。

② 情報リテラシー教育

利用者に対してどのような形で効果的な利用教育についてリテラシー教育を行っているかを担当者に聞き、本学のリテラシー教育の授業やガイダンスに取り入れたい。

③ 学習環境

特にグループ学習部屋に注視し、快適な学習環境を設置するためにハードとソフトの両方の面から理想の施設環境の有り方を探る。

### III プログラムの概要

このプログラムは1986年に開始され、今までに90か国から延べ900人以上の図書館員が参加している。2013年のテーマは昨年同様“Tool for the 21<sup>st</sup> Century Library”である。リーダーシップ、マネジメント、コミュニケーションスタイル、資金調達、アドボカシー、電子資料や紙資料のコレクション、専門家としてネットワークを築く方法、など学ぶ機会を用意している。

モータンソンセンターのディレクター：Barbara J. Ford氏、サブディレクター：Suzan Schnuer氏をはじめとし、事務手続き全般を担当のLindy A. Wheatley氏、プログラムコーディネーターのSuzan Harum氏、日常生活や研修全般のアドバイザーのStephanie Ahrang. Chung氏の5名により運営がなされている。講義は各図書館へでかけ、それぞれのサブジェクトライブラリアンが講義や説明を行い、見学においては公共図書館や大学図書館の館長または担当ディレクターによる図書館案内があった。

次に参加者であるが、私を含め世界9か国11名の参加があった。大学図書館、国立図書館、特殊な図書館など多岐にわたる。以下参加者と所属である。

- ・韓国：Jihae Jeon, National Library of Korea
- ・キルギス共和国：Elvira Niazova, American University of Central Asia
- ・ケニア：Martha Nderitu, Communications Commission of Kenya
- ・コロンビア：Juan Arboldea Nino, Banco de la Republica
- ・コロンビア：Silvia Valencia Vivas, Banco de la Republica
- ・サウジアラビア：Farasat Ullah, University of Mammam
- ・パキスタン：Muhammad Idrees, COMSATS Institute of Information Technology(CIIT)
- ・パキスタン：Muhammad Raja, COMSATS Institute of Information Technology(CIIT)
- ・ブラジル：Erica Saito, Physical Education and Sport School – Sao Paulo University
- ・ブルガリア：Milena Milanova, Sofia University “St.Kliment Ohridski”



<2013 年度研修参加者>

#### IV プログラムの研修内容について

プログラムは主に（１）講義（２）研修（３）各施設・図書館見学 ３つで構成されている。ここではいくつか選んで紹介する。なお、詳細スケジュールについてはモーテンソンセンターのホームページ<sup>ii</sup>に掲載されている。

##### （１）講義

##### ① 米国の大学図書館と公共図書館の現状

アメリカの大学図書館と公共図書館の現状について講義があった。国内に公共図書館は本館・分館をあわせて 16,604 館ある。運営費の 82%は地域の税金で賄われ、様々なサービスを展開している。その一つに、インターネットへのアクセスサービスがある。ほとんどの図書館で利用環境を整えており、特にビジネス向け・教育向けのオンラインデータベースを無料で利用提供、電子書籍も需要増に伴い 7 割近い図書館で提供している。その他には、新しい移民者へ住民サービスの情報提供や英語学習のサポート、地域活動している団体やコミュニティーミーティングルームの貸出サービス、図書館へ来館できない人たちへ貸出図書を配達するサービス、図書館間での相互貸借サービス、などアメリカならではのサービスが充実している。公共図書館は、近年の経済状況の悪化で需要が高まってきているとのこと。アメリカの公共図書館に関する知識がなかったので、研修期間中見学するにあたりこの講義がとても役に立った。

##### ② Discovery

イリノイ大学図書館で導入している Discovery サービス ExLibris 社の「Primo」<sup>iii</sup>について Grainger Engineering Library の Bill Mischo 氏と Webscale Metadata Librarian の William 氏による講義があった。Bill 氏によれば、同図書館の蔵書検索の結果のログを分析していくと、OPAC の全検索 66%はシングルキーワードによる検索で、また全実行数のお

よそ 3 割は過去のランキングの検索結果を取得したものであるということが分かった。これは単にヒット回数上位のものを持ってきているので、ランキング表示の限界、使われていないものがあるなど利用者にとって必ずしも最適な検索結果でないという。そこでいくつかある Discovery サービスのうち「Primo」を導入したことで、○検索の高速化 ○より正確なファセット機能による検索結果の絞り込みが可能となり、さらに「Primo」の特徴である、利用者の研究分野や専門領域によるランキングを調整するスカラーリンク機能を導入したことで、利用者にとってより最適な検索結果を上位に表示することを実現できた。この点について、同氏は「Primo」をかなり高評価していた。

## (2) 研修

### ① ワークショップ ; DISC 研修

3 日間にわたり「DISC」という自己診断ツールを使ったコンサルタントによる講義とワークショップを行った。自分や他者の行動パターンや強みを理解することで、業務における行動やコミュニケーションを円滑し、より良い人間関係や生産性の向上を促す。DISC とは Dominance (D) Infufluence (I) Steadineee (S) Conscientiousness (C) の頭文字をとったものである。初日は半日使い自己診断を行い、残りの 2 日間で結果とそれぞれの 4 つの特徴説明、個々人の職場で上司や同僚に対してどう行動をおこしていくか、ワークシートを使ったり、グループワークを行うなどして学んだ。

Dominance (D) ; 結果を求めるために挑戦・行動をおこすタイプ

Infufluence (I) ; 話すのが大好きで、熱中しやすいタイプ

Steadineee (S) ; 面倒見がよく・信頼できる、聞き役になるタイプ

Conscientiousness (C) ; 分析的で、正確で緻密に仕事するタイプ

上記 4 タイプに診断される。タイプ別にわかれそれぞれの強みや弱みを分析し何が足りないのか、どう改善すれば人間関係を向上できるかを考え、お互いに発表しあい、自分自身について気づきが得られた。また別の診断ツールを用いて所属する図書館の上司のタイプを割出し、仕事においてアプローチや提案の仕方について議論を行った。各タイプは全て各人に備わっているのであるが、強みの中でも自分の未使用の部分をどう伸ばしていくか、自分がどのような人で他者に対してどう接しているか、またはどう見られているかを認識したうえで、行動・仕事していくことが重要であるとのことである。講義の最後には、陣取ゲームを行い、異なるタイプとのチームワークの取り方や大切さ、大変さを学んだ。

### ② ワークショップ ; FISH ! 研修

研修最終日に、素晴らしい職場環境や良い人間環境を構築するには如何したらいいのかをシアトル “Pike Place Market” で取り組まれている FISH 哲学のワークショップを行った。これは図書「スティーブ・C・ランディ共著 (2000 年) 『FISH~鮮度 100%ぴちぴちオフィスのつくり方~』」にもなっている。マクドナルドから米国海軍など世界中の組織が本書の哲学を実践し、成功しているとのこと。その哲学とは「Choose Your Attitude (態度を選ぶ)」「Be There (注意をむける)」「Play (遊ぶ)」「Make Their Day (人を喜ばせる)」

の4つである。インストラクターの Jan Ison 氏はコンサルタントであるが、図書館勤務約 28 年と長いことから、例えが非常にわかりやすく、DVD やロールプレイを交えながらだったので、終始楽しく学ぶことができた。

### (3) 各施設・図書館見学

#### ①自動書庫見学：Oak Street Library in Illinois University

イリノイ大学内にある Oak Street Library を見学した。ここは、主に一般の図書で利用頻度の低い図書を保管する図書館である。約 333 万冊所蔵しており、今でも一日約 1000 冊受入れている。利用者は入館して利用できないので、各図書館カウンターから所蔵する図書の閲覧希望や貸出依頼をする。それを受け Oak Street Library では大きな重機を使い該当するトレイに入ってる図書を引出、該当図書を取ってくる。そして学内のキャンパスメールサービスを利用し、依頼のあった図書館へ該当図書を届けるといったシステムになっている。



Oak Street Library

< Illinois University >

#### ②公共図書館見学：Chicago Public Library

訪問したシカゴ中央公共図書館<sup>iv)</sup>は、1991年7月に“Harld Washington Library Center”<sup>v)</sup> といってシカゴ初のアフリカ系市長「Harld Washington」の偉業を称えて名づけられた図書館である。歳入の約 80%はシカゴ市とイリノイ州からの収入となるが、寄付金団体“Chicago Public Library Foundation”が4%しめている。この団体は、図書館資料やテクノロジー技術へのイニシアチブ、図書館利用者とコミュニティを結ぶ、ことをミッションとして活動している団体である。現在「One Book, One Chicago」といって、ある図書についての討論会や芸術作品の展示、著者シリーズ本の紹介、など様々な無料のイベントを開催して読書コミュニティ普及活動を行っている。

建物は、地下含め 11 階建、各階ごと分野別に資料が配架されている。8 階“Listening/Viewing Center Practice Rooms”があり、個室でピアノやボイストレーニングの練習ができる部屋を用意している。見学当日もボイストレーニングしている利用者がいた。Jazz の街シカゴならではの施設である。

3 階には幼児向けのフロアで、ベビーカーが通れるように書架間が広くしてあり、貸出返却デスクは子供の身長に合わせて低くするなどの工夫がされている。2 階には“Thomas Hughes Children's Library”と呼ぶフロアで、主に高校生向けのフロアとなっている。読書・課題をするコーナー、ゲームコーナー、PC コーナー、3 つにわけられている。パソコンについては、操作や



8th Floor Practice Room

< Chicago Public Library >

プログラミングを教えられるスタッフが常駐している。

訪問した公共図書館に共通することは、紙の図書・雑誌・新聞の閲覧や貸出といった従来のサービスに加え、子供へはパソコンに慣れ親しんでもらえるように言葉遊びのゲームを用意したり、社会人に対してはパソコン利用や Wifi 環境の整備、不慣れな利用者へは利用講習会など利用対象に合わせたパソコンやネットワークについてのサービスがとても充実しているのに大変驚いた。

### ③施設見学：OCLC

OCLC<sup>v</sup>はオハイオ州ダブリンにあるアメリカ合衆国のNPOで、国内の図書館や世界各国の大学や研究機関で構成される図書館サービス機関である。研修地イリノイ州からバスで東へ移動し、インディアナ州を通過して6時間のところにある。

OCLCは45年前の1967年、オハイオ州立大学のメイン図書館にてスタートした。現在正式名称OCLCは「Online Computer Library Center」であるが、当時は大学内にあったので「Ohio College Library Center」の略称だった。使命は“Connecting people to knowledge through library cooperation.”（図書館の協力を通じ、人と和をつなぐ）、ビジョンは“The world’s libraries connected”（世界の図書館はつながる）<sup>vi</sup>である。約3億レコード数、20億蔵書数を数える。扱っている言語のレコード数のうち60%は非英語圏のもので、そのうち日本語は8%を占めている。1971年8月に「仕事」「データ」「労力」をシェアするといったコンセプトのもと、コンピュータ分野でOSの一種であるDOSを使用し、初めて蔵書目録がオンライン化された。現在はWorldcat→Worldcatlocal→WorldShareとプラットフォームをかえ、世界中の図書目録をインターネット経由で検索できるようになっている。下記の写真は「Worldcat」のサーバ室、OCLCの心臓部である。この部屋の床



Worldcat のサーバ室  
<OCLC>

下は、ケーブルの増設やシステムを追加で設置できるようフリーアクセスフロアになっている。停電の時は地下にある発電システムから電源を供給して、データが破損しないような仕組みになっている。ホストセンターであるオハイオ州ダブリン以外にも、オーストラリア・シドニー、カナダ・トロント、イギリス・ロンドンの3か所にデータセンターを持っており、万が一本体がダウンしてもサービスが継続できるようなバックアップ体制を整えている。

また、オンライン化した頃からここダブリンで働く唯一の日本人、小鷹久子氏にお会いすることができた。担当は、日本語サイトの構築やマニュアルの作成から日系企業や日本人来訪者の窓口対応まで日本・アジア地域を一手に引き受けている。同氏は家族で渡米し、1976年オハイオ州立図書館で8年間勤務後、1984年からOCLCで勤務、来年で勤続30年になる。アメリカでの生活をはじめ、日本語への翻訳やコンピュータに関する業務上の苦労話から将来の学術ネットワークまでいろいろとお話を伺うことができた。お話によれ

ば OCLC の究極のゴールは、「世界の学術機関や研究所・図書館等の書誌・所蔵を一つの窓で検索できることである。それには、世界各国で異なるマークデータの一元化、非英語圏の言語（特にアジア地域言語）にも対応したインターフェイスやマニュアル等の作成が必要だ。」ということだそうだ。

#### ④図書館内の飲食について

近年、日本の図書館では東日本大震災以降、ペットボトルや蓋付きのボトルであれば飲むことのみ可能という図書館が少しずつではあるが増えてきている。だが、多くは閲覧席での飲食は一切禁止である。アメリカでは、公共や大学の区別なく、図書館にはコーヒESHOPがあり、通常の閲覧席ではコーヒーやジュースを飲みながら勉強や読書、インターネットや会話ができる。そのことについて各図書館の担当者に聞いてみると、今でこそ館内で飲むことは可能であるが、6～7年前までは日本と変わらず飲食についてどこの図書館でも不可能であったと回答が返ってきた。さらに詳しく聞いていくと可能になった背景には、a)インターネットの普及による来館者の減少 b)大手コーヒーチェーンによるカフェ文化の定着 があるとのことである。

従来は、雑誌や新聞を読み、紙の図書を借りに図書館へ行く。そこにコミュニティが生まれてくさんの人が集う。しかし90年代に入りインターネットの普及により状況が変わり、自宅や研究所から図書館へアクセスし電子図書を借り、また電子雑誌や新聞を読むことができるので、人が図書館へ来なくなった。そうした状況に危機感を抱いた図書館は、図書館へ来てもらう様にするにはどのような政策やイベントを行ったらいいかと検討したところ「コーヒESHOPを図書館内に設置」するという一つの結論に達した。スターバックスやタリーズコーヒーに代表されるコーヒESHOPには多くの人が集う。終始リラックスして、飲みながら話す人もいれば、課題や勉強をする人もいる。自宅での環境をそのまま図書館に作れば、コーヒーを求めに図書館へ行くことで、来館者も増えるというのである。こうした動きは2008年あたりから始まっているようで、現在でも一部の図書館では飲食や私物の持込を不可能とする図書館もあるが、今回見学したほとんどの図書館の入口付近にコーヒESHOPがあり、館内で飲むことも許可されていた。見学した大学図書館の一つ Eastern Illinois University Booth Library の図書館長に、飲食について伺った時のコメントを紹介する。「家庭でコーヒー飲みながら、読書やインターネット検索するのと同じだ。それを図書館でもやっているのさ。でも図書館それぞれの事情があるので、それぞれであった運用でいいのだよ。」館長のこのコメントがとても印象的だった。

以下、研修中に訪問した図書館・関連施設のリストである。

#### 【大学図書館】

- Illinois University Library
- Ohio University Library
- Loyola University Library



- Eastern Illinois University Booth Library
- Parkland College Library
  - 【公共図書館】
- Westerville Public Library
- Chicago Public Library
- Champaign Public Library
- Illinois State Library
- Urbana Free Library
- Arthur Public Library
  - 【図書館関連施設】
- Upshot Library
- OCLC (Online Computer Library Center)
- ALA (American Library Association)

## V 目的に関する情報収集

### (1) 電子書籍

今回の研修の目的の一つである図書館における電子書籍サービスに関する情報収集を行った。ここでは、研修終了後に個人的に訪問したミネソタ州にある **St.Thomas University Library**<sup>vii</sup>の例を紹介する。電子書籍については 4 年前にレファレンスブックを中心に、**Wiley** や **Gale** などの出版社から購入をしたのが始めだそう。簡単に購入ができ、ダウンロードや管理の手間が省けるという理由だからである。貸出できる電子書籍は、**Amazon** 社の **Reader : Kindle** にダウンロードしてサービスを行っている。サービス利用対象者は大学の構成員；教員・学生・事務職員に限り、貸出期間は 3 週間、予約利用があった場合に限り 1 日延滞する度に 5 ドルの罰金が科せられる。今後は電子書籍のタイトルや媒体を増やしていくようである。それには出版社との貸出やライセンス・価格に関する交渉が非常に大切で、「かなりタフな仕事だ」とヒアリングした **Dani Roach** 氏は言っていた。また訪問した公共図書館：**Champaign Public Library** でも同様のサービスを行っていて求めに応じ、予め電子書籍をダウンロードして **Kindle**<sup>viii</sup>をはじめ 2 週間貸出している。



電子書籍貸出キット

< Champaign Public Library >

### (2) 情報リテラシーについて

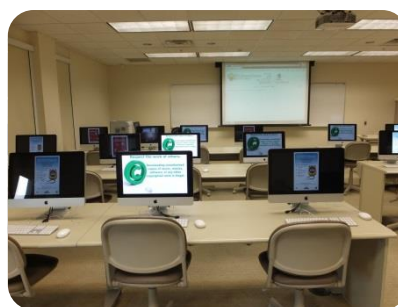
情報リテラシーについてイリノイ大学の **The Dean of International Asia Library** の **Steve Witt** 氏に伺うことができた。

開催時期であるが、毎年 9 月に行われる。夏休みに入る 6 月頃、教員があらかじめサブ



ジェクトライブラリアンへ授業で利用者教育を行ってもらうよう相談・依頼をする。1 コマ 50 分～60 分（大学院；3 時間）、内容は、図書館の活用法、教員の専門分野に関してのデータベースの利用方法、資料のサーチ方法、著作権問題、ILL による資料の入手方法など様々である。新学期が始まると各教室へ出かけ講義を行い、実習が必要な場合は図書館内にあるガイダンス専用ルームへ利用者に来てもらい、講義と実習の両方行う。サブジェクトライブラリアンが独自で行ったり、個別対応もしているが、基本的には教員の依頼に基づき実施するのがほとんどである。

また、右写真は研修中に見学した Eastern Illinois University Booth Library の“E-classroom”という PC 24 台が設置してあるガイダンスルームである。この大学でも新学期前に教員からあらかじめ依頼され、図書館資料の探し方やデータベースの検索方法など実習を交えてガイダンスを行っている。Eastern Illinois University は 1895 年設立、教員養成の大学として創始した。大学のある街チャールストンは、全人口約 20,000 人、そのうち約 12,000 人が学生という小さな街にあるので、娯楽施設もないので地域住民は Booth library をよく利用する。高校生対象に、“資料のリサーチの仕方を学ぶ”といったイベントなどを開催して地域住民へリテラシー教育をおこなっている。



E-classroom  
<Booth Library>

### （3）グループ学習室

訪問先の大学図書館で全てグループ学習室を設置している。机（1 脚）、椅子（定員数分）、液晶モニター（1 台）+ディスプレイケーブル（1 本）またはホワイトボードが設置されている。いたってシンプルな部屋である。利用者は Web 上から予約を行い、所定の時間になったら利用する。部屋の外側は、中が見えるようにガラス張りになっているので、開放感がある。一部の図書館ではプライバシーに配慮してくもりガラスになっているところもある。このガラス窓にすることで、部屋の利用者からは常に見られている意識、反対に部屋を覗く他の利用者にとって勉強や学習する姿をみて刺激を受ける、といった効果があるそうだ。運用に関してはそれぞれである。例えば、イリノイ大学の Undergraduate Library<sup>ix</sup>では、○予約は 1 週間最大 2 件まで ○グループワーク・課題研究等を目的とする ○グループのみでの利用、一方 Royola University Library<sup>x</sup>では、○1 週間最大 6 時間まで ○授業・講義・セミナー等での利用は不可能、というふうにルールが定められ、同じ大学図書館であるが運用は異なる。夏休みの期間であったが、一人で黙々と勉強している学生、本番さながらにプレゼンテーションの練習をする男女 3 人のグループ、など利用風景を見ることができた。



Group Rooms  
< Undergraduate Library >



Group Study Room  
< Loyola University Library >

## VI ALA報告

同州内シカゴで6月27日～7月2日まで開催されているALA(American Library Association; 全米図書館協会)年次報告大会2013<sup>xi</sup>へ参加した。研修終了後に大会へ参加できるようにプログラムされている。参加は任意であったが、3人の研修会仲間と大会へ参加した。ダウンタウンから公共バスで約25分、主要ホテルからは大会専用シャトルバスで15分のところにあるマコーミックプレイスという施設で行われ、雰囲気は毎年日本の横浜で行われている図書館総合展のようなものであった。さまざまな講演やポスターセッション、企業・出版社・団体等の展示ブースがある。○Proquest ○EBSCO ○Wiley ○Cambridge Press ○Margent ○3M ○OCLC 等々日本でお馴染みの出版社のブースもでていた。ちなみに日本国籍の企業は見る限り、出展してなかった。

28日のオープニングセレモニーに参加した。冒頭でRahm Emanuel シカゴ市長は、「協会の役割は大変大きい。これからも各図書館や専門職機関へ教育、様々な変化への多様性、情報を提供し続けてほしい」と挨拶。その後、協会に功績のあった方たちへの表彰や海外招待者の紹介のち、『FREAKONOMIC(邦題; ヤバい経済学)』の著者“Steven D. Levit”氏基調講演があった。

終了後は各ブースを見てまわった。まずは会場の広さに驚く。日本の国際展示場と同じかそれ以上

の広さに約2600ブースがあって一日ではとてもまわりきれない。ブースでは各データベースや電子書籍の紹介、図書自動貸出システムや自動書庫の展示、ベストセラー本をもつ出版社はサイン会や書籍の販売をするなど、我々が毎年参加する総合展とほぼ同じ会場の雰囲気・活気だった。期間中、会場やどこでも“Wifi”によるインターネットへ接続可能、しかもパスワードなしで利用でき、タブレット端末やPCを持っている人には大変助かるサービスである。



シカゴ市長の挨拶  
< ALA 年次報告大会 >

## VII セントトーマス大学図書館 / ミネソタ大学図書館

今研修と ALA 年次報告大会参加終了後、アメリカ北西部の五大湖に面するミネソタ州内にある University of St.Thomas と University of Minnesota(Uof M) の 2 大学へ訪問。本学元客員講師の協力を得て実現した。U of M は、Ohio State University や Arizona University に次ぐ全米第 4 の規模を誇る大学で、今回ツインズシティー校の Wilson Library<sup>xiii</sup>内にある East Asia Library を訪問した。東アジア地域でも、中国・韓国・日本を中心に図書・雑誌や映像など 154,000 以上の資料を所蔵、ホームページからは各国のオンラインデータベースへアクセスできる。石ノ森章太郎氏の作品「サボーグ 009」「HOTEL」などのマンガも所蔵していた（右下写真）。特徴なのは、同大学図書館では学習や研究目的にあわせてゾーンをわけ、様々な利用環境を提供している。○Group and Quiet Study ○Studying with Coffee ○Deep Quiet Study Room 等である。左下は Wilson Library 3 階の「Deep Quiet Study Room」で、より静粛な空間で勉強したい利用者向けの部屋である。



Deep Quiet Study Room  
<University of Minnesota>



マンガ Wilson Library 所蔵  
<University of Minnesota>

## VIII 研修を振り返って

1 ヶ月間という長期間にわたり実際にキャンパスで生活し、図書館に関する講義や見学、そして利用することで多くのことを学ぶことができ、有意義な研修であった。米国の大学図書館だけでなく公共図書館も含めた地域で、サービスが充実しているのを目にした。

多く見聞きしたが、一番感じたのは、生活や学習スタイルにあった図書館運営である。例えばネットワーク環境。通信会社を気にしなくても、大学キャンパス内のネットワークならアクセスが可能で、図書館から、学生寮から、教室から、どこでも利用できる。公共図書館でも館内であれば利用でき、しかも許可されている場所であればコーヒー飲みながら利用できる。さらに、近年需要が高くなってきた電子書籍の貸出サービスを始めたり、また静かに学習したい利用者向けやグループ利用など目的や学習の形態にあった学習室・ミーティングルームの設置などを行っている。公共図書館と大学図書館と図書館の種類は異なるが、両図書館共通して高水準で同内容のサービスを展開している。その実現には、各図書館のミッションやポリシーのもと、図書館員がリーダーシップを発揮して、常に利用者のことを思い、何が必要かを考えているからである。

日本の図書館と比較して、電子資料やグループ学習室など先駆的な取組みや利用者を意識した図書館運営は非常に参考になった。今すぐにでも導入したい。しかし、優れたサービスやシステムをそのまま自館へ取入れることは、米国の文化や社会背景、歴史があるので、大変難しい。今回の研修の取組み事例を参考に日本社会に適した形にアレンジし、サービスや図書館運営を行っていききたい。

#### ※ 謝辞

研修期間中様々な方にお世話になりました。ディレクター：Barbara J. Ford 氏をはじめとするイリノイ大学モーテンソンセンターのスタッフとイリノイ大学皆さん、OCLC、公共図書館や大学図書館の担当の皆様、そして各国から参加した 10 人の仲間、充実した研修会となりました。感謝申し上げます。また貴重な機会と費用をサポートしてくださった私立大学図書館協会、長期にわたり研修へ許可いただき、快く送りだして頂いた亜細亜大学図書館の皆様には心から深く感謝申し上げます。

---

i Mortenson Center for International Library Programs

<http://www.library.illinois.edu/mortenson/>

ii View the 2013 program schedule

<http://www.library.illinois.edu/mortenson/associates/Schedule.pdf>

iii LibGuides@University of Illinois Library Primo

<http://uiuc.libguides.com/primo>

iv Chicago Public Library

<http://www.chipublib.org/>

v OCLC

<http://www.oclc.org/en-asiapacific/home.html>

vi 紀伊國屋書店 OCLC サイト

<http://www.kinokuniya.co.jp/03f/oclc/oclc/top.htm>

vii university of ST. Thomas library (Borrow a Kindle)

<http://www.stthomas.edu/libraries/books/kindles/>

viii Chicago Public Library

<http://www.champaign.org/downloadables>

ix Undergraduate Library in Illinois University

<http://www.library.illinois.edu/ugl/about/collaboratories.html>

x Loyola University Chicago Library

<http://www.luc.edu/ic/groupstudy.shtml>

xi ALA Annual Conference & Exhibition

<http://ala13.ala.org/>

xii Study Spaces in Wilson Library, University of Minnesota

<https://www.lib.umn.edu/wilson/study-spaces>

#### 参考資料

聖路加看護大学図書館 佐藤晋巨氏「2012 年度海外派遣研修報告書」

文教大学越谷図書館 鈴木正紀氏「2011 年度海外派遣報告書」

立教大学図書館 伊藤秀弥氏「2007 年度海外派遣報告書」